
空を見上げて

蒼葉 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空を見上げて

【Zコード】

Z6587A

【作者名】

蒼葉 樹

【あらすじ】

翼が欲しいと願つただけ。皆、そう。見た目は幼い朱美と、少し大人びて見えるヒルドの世界を超えた、一つの恋物語。

Wings プロローグ

空を見上げると、思い出す。私の住んでた、あの世界。
早く、戻れると良いな。

翼が欲しいと思った。大空を飛びたいと思った。
でも、ただそれだけ。
別世界に行きたいなんて、思ったこともない。

Wings 1 翼を求めて

ここへ来る事になつたのは、ある神社で聞かされた。
その日私は、翼が欲しいと願つていた。

空を見上げると、たくさんの星たちが瞬いでいる。
その中に一つ。他の星よりも更に眩しく輝く星があった。

「綺麗…」

思わずついつりしていた。

「え…？」

そう思つたのも束の間。

その星から一人の女性の影が見えた。

それが一瞬にして私の目の前に。

「……誰？」

目の前に現れたその女性は、長い白銀の髪を持ち、陶器の様に白い肌をしている。

背は高く、下から見上げる私の視界から大きな月は隠された。

彼女の背中には、大きな翼が…。

「こんばんは。私はカイナ。あなたのお名前は？」

「朱美…。つてそういうことじゃなくて！」

「私はあなたを迎えて来たの。あなた翼が欲しいのでしょうか？」

「ええまあ…」

「私の世界では毎年あなたのような人達をお迎えしているの」

彼女の話によると、一年に一度、何処か別の世界で翼を欲しがる人々を迎えるといつ。

迎えに来られた者は、嫌でも連れて行かれるらしい。

今年は私の番なのだ。

「え…てことは、私も連れて行かれるの！？」

「そういうことになるわね。さ、行くわよ、朱美ちゃん」

「カイナさん待って。私は空を飛びたいと思つただけなの」

「ごめんなさい。私はあなたを連れて行かなければならぬの」

カイナは手を肩の位置まで挙げる。

指の腹でパチン、と音を鳴らした。

バサツ……

背後から音がした。振り向くと、白く、大きな翼が背中から生えていた。

背中に意識を集中させる。

すると、自分で羽ばたく事ができた。

「素適な翼…。でも、どうして行かなければならないの？」

「それは私にも分からぬ。ずっと昔からして來たことだから」

「そう。私も欲しがつたりするからいけなかつたのね」

「大丈夫よ。国王様が許して下さればこの世界に戻つて來ることが出来るわ」

「本当…？」

彼女は笑みを浮かべながら頷く。

「もう時間が無いわ。そろそろ行きましょう」

私は諦めて付いて行くことにした。

この世界の人々と当分会えないのを分かっていながら……。

私はカイナに手を引かれ、地上から足を離していくつた。

背中の翼を力一杯羽ばたかせ、彼女を追う。

正直私は、新しい世界での生活に、少しだけ、期待していた……。

Wings 2 イネキス

「あのう…大、丈夫…ですか?」

声が聞こえ、目を覚ます。

辺り一面の、草むら。

そして、田の前に居るのは、幼い顔をした少女。多分、15、6歳位だろうか。

「おーい」

僕が動かないのを不思議に思い、再び声をかけてくる。

「あ、ああ、悪い。大丈夫だ」

「あ、あの、すみません。変なこと口にして…」

「そんな事は構わないが、一つ、聞きたい事がある」

「はあ、何でしょう」

何かを期待するような、きらきらした田を持つその少女は、本当に幼く見える。

可愛らしい、とでも言ひのだろうか。

まあ、まだ成人しても居ない僕が言ひのは可笑しい気もするが。

「ここは一体、何処なんだ?」

「え?ここに来るの、初めてですか?」

「あ、ああ」

「ここはイネキスです」

「イネキス…?」

「はい。余分なものは無い、という、この国の言葉です。

ですから、皆が必要である、という意味で付けられた国名です
「なるほど。それで、イネキスと」

僕が納得して頷くと、彼女は嬉しそうに笑みを浮かべる。
そう。彼女自身がこの国に誇りを持っているかのようだ。

「ところで、名前はなんという?」

「あ、すみません。自己紹介もまだで…」

「いや。名前がちょっと気になつたものでね。

僕はヒルドといつ

あけみ

「わ、私は、朱美といいます。私も先日こちらへ着たばかりでして

…

「そうか。天使のように可愛らしい名をしている。その真っ白な翼
も素晴らしい」

彼女は顔を真っ赤にしながら、背中に生えた大きな翼を小さく置んだ。

「ところで、ここはどんな所か分かるか?」

「いえ、まだあまり…。実は私、地球という惑星ほいたんですね。

それで、翼が欲しいと毎晩近所の神社で願っていました」

「では、その翼は…?」

「これは、つい最近この国の案内人の方が私を迎えていらした時に
魔法か何かで生やされたものです。ですから、はじめから生えていた訳ではないません」

この国には、毎年一人ずつ何処かの世界から誰かが連れてこられる。
そう、皆、翼を欲しがる者たちが…。
僕も、その一人だから良く分かる。

「君は何だか天然みたいだけど、それは生まれつきなのか?」

「……」

俯いて彼女は黙り込む。

何か、悪い事でも聞いてしまったのだろうか。

少しの沈黙の後、ゆっくりと朱美は口を開いた。

「それが…分からないんです。

ここへ来る前の事、ここへ連れて来た人の事。

ただ覚えてるのは、私が地球から誰かによつて連れて来られたということだけ…。

理由は皆同じなので分かつてるんですが

小さく笑う彼女の顔は、何処か寂しそうで、何処か苦しそうだった。僕も、ここへ来る前の事は覚えていない。

何をやつていたかも分からない。

覚えているのは、翼を欲しがつていた事、その所為で誰かに連れてこられた事だけ。

きっと、連れて来られた者たちは、皆同じ状況なのだろう。だから、性格も変わつてしまつているのかもしれない。

「朱美、帰るわよ。何やつてるの?」

少しはなれた所から声が聞こえた。

澄んだ、大人びた女性の声。

「カイナ姉ちゃん。分かった。今行く!」

「君のお姉さんか? あの人は」

「ええ。もちろん本当のじゃないけど…」

「朱美？」

まだ来ない妹を心配し、もう一度声をかけて来るカイナ。

「じゃ、じゃあね。ヒルドさん、これから頑張ってね！」

「あ、おい……」

急いで姉の元へ駆けて行く朱美。

僕の声なんて、もう聞こえるわけも無かつた。

これから僕の人生を、示されているようだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6587a/>

空を見上げて

2010年10月28日08時10分発行